

【外題】

里見八犬傳 第三輯 卷三

【本文】

南總里見八犬傳第三輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第廿五回

情を含て濱路憂苦を訟ふ
奸を告て額藏主家に還る

再説暮六は、水に溺れしやうにして、飽まで信乃に介抱させ、且して眼を開き、手を抗足を動しつ、やうやくわれにかへりし如く、扶起されて自脈を診り、「かくてはわれは再び生たり。危かりし」と傍なる、柱に携て立あがれば、信乃はその本復の速なるを歡びて、俱に河辺の小屋を出れば、土太郎は左母二郎を、乗せつゝ舩をこなたへよせたり。當下信乃は遽しく、わが単衣を被て、刀を腰にする程に、左母二郎は暮六が、手を携て舩に乗せ、その恙なきを祝するに、或は水中の動作を問、或はその苦惱を告て、果は笑声高くなるまで、興して岸を離るゝものから、前愆に懲たりとて、再び網をおろすことなく、懸て前面に著させて、獲の雑魚を魚畚に移させ、なほ餘れるをば、篠の枝に貫きなどして、これを蒼竹の真申に括提、信乃と左母二郎と、その本末を相携たり。暮六は、件の二人を先に拉して、腰巾着を搔撈つゝ、多少はしらず土太郎に、紙捻して取るは、今宵の辛苦銭なるべし。この土太郎は、河舩の備載などして、生活にすなれど、一処不住の癖者なれば、豫て暮六に相譚れて、信乃を口はんとしつる也。かくてこなたの兩人は、一町あまり先に拉たる、信乃等がかたを折々見つゝ、何事やらん密語めり。又先なる兩人は、遙に後方を見かへりて、ねりも得ゆかず待ほどに、暮六懸て走り來つゝ、うち連拉て家路にいそぐに、十七日の月は出たり。戦く青田に風渡る、夜行は殊に涼しくて、うち相譚つゝゆく程に、暮六は信乃等にいふやう、「今宵の怪我は生涯に、復あるまじき不覚なりき。龜篠等にしらねば、いつまでもいい出て、漁獵を禁るならん。努秘すべし秘すべし」と真しやかに口を鉗めつ。既にして庚申塚のほとり近くなる程に、「一袂の物を背負て、前面より來るものありけり。引提たる挑灯は、紛ぶべくもあらぬ、背介にこそ、と見てければ、暮六はやく呼かけて、「などでやくは遅かりし」と問ば背介は小腰を折め、「割籠の準備せざりし故に、思はず時を移したり」といはせもあへず眼を瞪らし、「臆鈍や、白物們、わが出るとき炊爨に、云云といひたるに、例の籠耳脱せしな。今にしても來るとも、何にかせん」と陽腹たちて、皆共侶に里に還れば、亥時は過たるなるべし。左母二郎

は幕六を、そが門遣まで送りつゝ、夜の深たればとて、裡面には入らず、信乃にも叮嚀に別を告翌の啓行を祝しつゝ、おのが宿所へかへり去ぬ。

かくて幕六は、奴婢一兩人呼び起させて、獲の雑魚を肴とす。烹もし焼もする程に、龜篠が盪る、酒もよき比なりしかば、件の奴婢を就擗て、夫婦は信乃を納戸に招くに、許我までの従者には額藏を遣せばとて、はや臥たるを呼よせて、響応態に酌を執らせ、此彼四人團坐して、兎別の盃を遶らしけり。既に酣なる比に、幕六は龜篠して、百匁あまりの銀とり出させ、路費にとて信乃に遞与つ。その真やかなる、よつう年来には似るべくもあらず。さて路次の事、許我へ参りての事などをうち相講ぶにぞ、夏の夜の短くて、はぢ丑三になりぬべし。「霎時也とも目睡では、翌の道中堪がたからん。とくく睡り給へ」といふ、龜篠が言の葉を立しほに、信乃額藏は告別して、おのれが臥房に入りぬ。このとき奴婢はいきたなくて、皆熟睡せざるもなく、濱路さへ病發りぬとて、甲夜より子舎に臥たり。

當時幕六は、神宮河にて熟計て、信乃を水中に詔引入れたる、その事の趣を、龜篠に密語は龜篠耳を傾て、笑つゝ聞くこと半晌ばかり、心はえせで点頭影は、圓行燈の望の月、跳る兎に彷彿たり。かく耳語つゝ幕六は、乾る唇甜濡し、「われ復船に乗りしとき、左母二郎が目を注せて、既にその意をしらせしかば、渠は必定彼宝刀を、搦替たるに疑ひなし。翌といはんも待わびしきに、一見せん」と燈燭を、やをらほとりへ引よせて、瑋緩へて拔放に、夜目なれば焼刃の色、定かにはわかねども、現鋭刀とおほしきに、鞆の内より水滴りて、席薦の上に置く露を、幕六は疑ひて撈り見つ、顛て見つ、「奇なるかなこの刀、抜放ときは水氣あり。殺氣を含てうち振れば、降そぐ雨に異ならず。この奇特あるにより、村雨丸と名づけられし、と年来聞けども、見るは今、吁たふとし、吁めでたし。奇也々々」と賞嘆し、その雷をいく遍坎、指に染つゝ額に塗りたる、夫を見まねに龜篠も、物体なや、と指頭もて、拭ふて戴く一滴水は、是神宮の河水也。彼左母二郎も奸智に長たり。おのが刃と件の宝刀と、三方替にしつるとき、後に必ず幕六が抜放見んことを慮りて、そが鞆に少許、河水を沃ぎ入れて、おのが刃を納替たり。こは村雨の刀尖より、水氣滴るといへば也。とはしらずして幕六は、天に歡び地に喜び、刃を納てうち戴き、「三十年來懸念せし村雨の宝刀わが手に入りぬ。諸願成就」と唱れば、龜篠もうち念じ、「かくまでにおもふ事、思ふが隨になるものかな。嘉酒に今一度、過ぎ給へ」と勸れば、幕六は盃とり揚げ、「今宵は大事とこころして、まだ酔までに喫さりき。額藏には彼密事を、説示し給へりや」と問は龜篠、頷さしよせ、「そこらにぬかりあらずかし。甲夜に信乃等ををらぬ間に、彼奴を竊に招よせ、如此々々と説示

し、箇様々々にこしらへたれば、それを真に業て一議に及ばず、こころ得果て立侍りき。信乃が敵手に不足なりとも、騙に術なしと俗にはいふ。よろづに運の向ときなれば、大かたは事成なん。よしや額藏が手に乗らで、反撃になればとて、はやその宝刀を奪奪たれば、こなたに損はなきごとよ。さはおほさすや」と潜めき告。幕六聞て、「寔に然なり。宝刀をは畧る、信乃をは出す。そがうに入亦結果るは、墮胎患ぬ為なれども、為損したりとて書にはならず。額藏は殺されて、信乃には恙あらずとも、亦唯われを疑ふて、訟ることありとも、年来信乃と額藏が、睦からぬは人愈しらすん。よりにて額藏は、私の怨により、信乃を書せんとせしならん。われは故よりしらすといはん。かゝれば陳するに辞あり。これは是萬一の活路を造るのみ。思ひ過すがごとくならんや。遠からずして額藏が吉左右を聞んのみ。旨々」とうち罵らす、舌を吐つゝ口に手を、當飲は現盜上戸。」おん身もすべせ」とさす益を、直に受ても構道ゆく、夫婦齧盤の欺詐は、齧齧るをこら焼の、肴荒して暴食ひ、果は茶碗になみ〜と、篩せ篩れて一喫に、あほり著たる物わかれ、拳を巻て息を吹き、引ぢらしたる盆盤を、とりも納めず、共侶に、臥房に入れば程もなく、鼯の声そ高かりけり。さる程に、信乃は臥房に入りしかど、睨るを待はいもねられず、ひとりつく〜久後を、思ふ物から身ひとつを、誰はとめねど父母の、墳墓に今ぞ遠離る、里の名残のいと惜き。こころはおなじ真砂路の、濱路は臥房を脱出で、竭め恨をいふよしも、納戸の鼯は二親の、目覚ぬ程にと心のみ、せかれて逢ぬかたにさへ、なほ憚の関の戸の、音たてさせじと鬨踏む、膝は戦へて定めなき、浮世と思へば形なく、悲しく、うじやく、恨しき、郎の枕に近づけは、信乃は来る人ありと見て、刀を引よせ、岸破と起、誰や、と問は音もせず。原來癖者ごさんなれ。わが寐息を窺ふて、刺も殺さん為に坎」と疑へばいよ、由断せず、行燈の火光さし向けて、熟視れば濱路なり。端なくは得進まで、鼯の後方に伏沈み、声は立ねど啞咽る、涙に外をしのぶ撮、素れ苦しと唧めり。強敵には懼れざる、壮客ながらうち騒ぐ、簪を鎮めて鼯を出、釣緒を解つゝ臥簾を片よせ、「濱路は何等の所業ありて、更鬨たるに臥もせず、こゝへは迷ひ來給ひし、瓜田には沓を答す、李下に冠を正さずといふ、諺めるをこらさすや」と咎れば恨じけに、涙を拂ふて頭を擧、「何しに來つる、と外々しく、いはるゝまでに形なき、妹妹は名のみ糾纏の、化結なる中なれば、しか言ふも無理ならねど、一回親の口じから、許し給ひし夫婦にあらずや。日來はとまれかくもあれ、今宵限りの別れぞ、と告こらせ給ふとも、おん身の恥にはなるまじきに、出てゆくまでこらさず免に、只一ト言の捨言葉、かけ給はぬは情なし。心つたし」と怨すれば、信乃は思はず歎息し、「人木石にあらざれば、有繫に情をしりつゝも、嫌疑の中に身を措故に、口を開きて告るによしなし。おん身が誠はわ

れしれり。わが胸中をはおん身しるらん。許我は僅に十六里、三四日には往還するに、かへり来る日を俟給へ」と賺せは濱路は目を拭ひ、「左のたまふは偽りなり。一トたびごを去り給はゞいかでかかへり來給ふべき。籠鳥の雲井を慕ふは、その友をおもへばなり。丈夫の故郷を去るは、その禄をおもへばならん。さてもわが彼ニがたは、愛敬憎悪定めなく、おん身を鬱怏くおもひ給へば、大約此度の起行も、出し遣るもの、還るを樂はず。出てゆく人、甞るをよしとせず。かゝれば一トたびごを去て、いつれの日にか還り給はん。今宵限りの別れにこそ。わらはが親は四はしらあり。そはおん身もしり給はん。しかれとも現在の、二親これを告給はず。灰に傳へ聞侍れは、実の親は煉馬の家臣、胞兄弟もあり、とばかり聞えて、その姓名は定かならず。されはとて、養育の恩義を今さらに、化には思ひ侍らねど、産の恩も亦高かり。いかで実の親のうへ、しらまくすれど女子の甲斐なき、人に告べき事ならねば、身ひとつに物を思ふなる、目睡ぬ夜の明がたの、夢にもがたと願言に、祈らぬ神はあらずかし。斯思ひつゝ年月を、送るはいとも苦ききに、去歳の四月は思ひかけなく、豊嶋煉馬の両家滅亡、そが家隸老黨も、皆遣りなく撃れき、と風聞大かたならざれば、さではわが親同胞も、得こそは脱れ給はじ、と思へばいと哀しきの、やるかたもなき嘆きして、乾ぬ袖の片しくれ、親には包む憂苦勞、切ておん身にうちあかさば、親同胞の名をも知らん。その陣歿の迹をしも、吊んよすがは外になし。世にある限り連まとぶ、良人には何を隠すべき。繁き人目の関の戸に、鶏のそら音のあれかし、と思ふものから折もなき、折を稍得て近づけは、はやく母御に跟られて、遽迷ひて返きしは、去歳の七月の比なりき。これより後はいさゞ川、堰れて中は絶たれども、下ゆく水のかよひ路は、かはらぬ心の誠のみ。朝な夕なにおん身のうへ、恙もあらず世に出、富栄させ給はせ、と禱らぬ日てはなきものを、心つよきも限りあり。妻を棄給ふが伯母御へ義理故。わらはが思ふ百分一、おん身に誠ましますば、如此々々の故ありて、かへり來ん日は定めかたし、潜びて出よ、共侶に、と宣はするとも夫なり妻なり、誰か密夫とて譏るべき。いと強面し、と思ふ程、離れかたきは女子の誠、分つ袂にふり棄られて、あくがれて死んやり、おん身刃にかけてたべ。百年の後を冥土にて、俟侍らん」とかき口説く、いとも切なる恨のかずゞ、泣音憚る千行の、涙は袖に湛たり。

信乃はその声外にや洩ん、心苦し、といへばえに、岩井の水をむすびかけし、縁しをこゝに釋しなれば、愀然として嗟嘆しつ。又きたる手を膝に措き、「やよ濱路、おん身が恨はひとつとして、理りならずといふよしなけれど、いかにせん、わがこの度の起行は、伯母御夫婦の指揮によれり。実は吾侪を遠離て、おん身に壻を招ん為なり。素よりわれはおん身の為に、夫にして夫にあら

す。そはいひかたき二親の、底意を猜し給へるならん。然るを今さら情に攀れて、おん身を誘引出
しなば、誰か淫奔といはざるべき。甞りかたきを甞り給ふは、便是わが為也。去かたきを出てゆ
くも、亦是おん身が為ならずや。縦且く別るゝとも、送「こゝろ変らすは、遂に全聚るときあ
らん。親達の目覚ぬ間に、とく〱臥房にかへり給へ。われ亦心かけんには、おん身が親をたづ
ね考へ、存亡をしる便著もいで來ん。とく去給へ」と諭しても、立もあがらず頭を掉り、「濡ぬ前
こそ露をも厭へ。二親のいざとくへ、こゝへ來つるを咎め給はゞ、わらはもまうす事侍り。只共俗
に、と宜はする、おん身の心を聞侍らば、生て鬪の外に出じ。殺したる」と衝話し、かよはき
女子の魂も、こゝに居りて動かねば、信乃はほと〱困じ果て、潜びながらの声を激しく、「さりと
ては亦聞わきなし。命あらは時もあらん。死るが人の誠かは。たま〱伯母と伯母夫の、許しを得
たる出世の首途、妨せはわが妻にあらず、過世の讐放」と寫れば、濱路はよく泣沈み、「こゝ
ろの願ひを遂んとすれば、おん身の仇になるよしを、諭し給ふに術も

【挿絵】「菅家／なげはこそわかれを惜しめ鶏のねの聞えぬさとのあかつきもかな」「額藏」「はま
路」「信乃」

なし。とにもかくにも形なき、わが身ひとつの故ならば、思ひ絶て甞り侍らん。さざば道中恙な
く、折から烈しき日ませず、許我へ参りて名をも揚、家を興して、冬籠、北山下風吹くこゝは
風の便にしらせてたゞ。筑波の山のこなたには、恙もなくて君ます、と思ふのみにて侍りてん。今
より弱る玉の緒の、たえなばこれを、この世のわかれ、憑むはまだ見ぬ冥土のみ。二世の契りは
必よ。御こゝろ変らせ給ふな」と憂なき事を木綿袴、掛けてそ契る願言は、伶俐見えても恍惚子な
る、未通女こゝろの哀れなり。信乃も有繫にうち芝折れ、慰めかねて點頭のみ。又いふよしもなか
りけり。

折から告る八声の鶏に、信乃は心をおくの間なる、「二親めざまし給はなん。とく〱」といそ
がし立れば濱路はやうやく立あがり、「天も明は狐に咬なん腐鶏の未明に鳴て伏を遣つゝそれは恋
せし草まくら、是は旅ゆく妹妹のわかれ、鶏も鳴ずは天も明じ。暁すは人の目も覚じ。恨しの鶏の
音や。よに逢坂のあふ宵はあらで、ゆるさめ関はわがうへに、在明の月ぞ果敢なき」と口実つゝ出
んとすれば、外面に咳して、障子をほと〱とうち敲き、「鶏が謡ふて候に、いまだ覺給はずや
と呼起す声は額藏なり。信乃は呼れて遽しく、応をすれば額藏は、庖油のかたに退きけり。疾こ
の際に、と出し遣るゝ、濱路は臉泣腫し、間きかたより見かへれど、涙に霞む狭山形、紙張の壁
に身をよせて、おのが臥房に泣にゆく。現悲しきは死別より、生別にますものなし。

吁罕なるかも、この未通女。いまだ鴛鴦の念を繋ねず、連理の枕を並へずして、その情百年の夫婦に勝たり。尔るに信乃は情に引れて、その心を動さず、よくその情に従ふて、男女別ある趣を得たり。夫色界の迷津は、賢不肖無差別也。江湖許夢の少年輩、一トたびこの岸に臨て、溺さることあるもの少し。然るを今この義夫節婦あり。濱路が恋慕は、染みて淫せんとにあらず。信乃が嗟嘆は、悲て傷らず。濱路が情はなほ得べし、信乃が如きはいよ〜稀也。

問話休憩、この暁天、額藏は、いちはやく起出て、火を打水を汲、炊き了りて、信乃に飯を勧め、己もたうべて共侶に、行装する程に、奴婢等も大かたは起たり。かくて信乃額藏は、支度形の如く整て、あるじ夫婦が覺るをまつに、明六の鐘は聞ゆれども、夫婦は宿酒醒すやありけん、いまだ臥房を出ざりけり。信乃はこの朝涼に、心いそぎのせらるるれど、「一言半句も辞せずして、出てゆかんはさすがにて、そが臥房に立よりつ、「おん目を覺し給へりや。只今發足仕れば、おん暇乞をまつす也。信乃にて候。覺給へりや」と声高やかに呼覚せば、暮六は夢こころに、「ゆきね〜」と心にけり。信乃は再び声をふり立て、「伯母御はいまだ覺給はずや。信乃が發足の暇乞に、まぬり候は」と呼立れば、龜篠寝惚し声をまにて、「ゆきね〜」と心けり。信乃は心を聞果て外面に退くに、濱路は有繫に泣顔を、人に見られんことをしめて、立も得出す、細やかに、障子を開て目送りつ、辞は絶て酸鼻む、妻に別るゝ旅衣、今たち初る信乃額藏を、送る奴婢等は惚忙しく、背介もる共門に出て、衆皆名残を惜めへず、祝して雲時散動き息。

さる程に暮六龜篠は、昨夜深に熟酔て、寢に就し事なれば、朝日高く昇る比、やうやくに起出つ、信乃は、と問へば、「云云にて、明六の鐘もる共に、啓行し給ひき」と奴婢等が告るに呆果て夫婦目と目をあはしつゝ、ぬかりにけり、と思へども、愧る色なく舌うち鳴し、「さあらんには汝等は、などてわれには告ざりし。信乃も亦不敬也。苟且ながら起行に、告別せぬこととはある」と高声合して敦圍ば、「否彼人は臥房に立より、云云と告給ひしに、ゆきね〜、と心給ひき。原來寐言でをせし欵」と一人がいへば堪かねて、衆皆咄と笑ふになん、夫婦はいよゝ腹立て、「此奴等何がおもしろき。とにかく信乃が事としいへば、取持兒こそこゝろ得ね。そこら三遍掃出し、門へ塩花揮らずや」と囁著如き坂東訛、哮立れば青嵐、鳴子の音に群雀、驚くが如、愈避たり。そが中に濱路のみ、この日も病て臥房を出ず、心持死ぬべくおぼゆるとて、著とることなかりしかば、「二親はしかすがに、養老女兒を死しては、まぎ〜見ゆるまの山、出世の梯中絶ん。」鍼よ薬餌」と諜々しく、われから女兒に使うゝ、愛にはあらで勢と、利に就までの系せ祈禱、親の慾こそ無慙なれ。

時に文明十年、六月十八日の朝まだきに、犬塚信乃は、年来の、志願やうやく時、到り、額藏を將て下総なる、許我の御所へ赴んとす。この年、信乃は十九歳、額藏は廿歳なるべし。抑この両雄は、既に同盟合體して、義を結び誓を立、艱難與に相救ひ、苦樂を等くせんとのみ、こゝろは信義の郷にあり、身は亦汚吏の家に在れば、人目はかりは睦しからず。額藏は信乃を譏り、信乃は額藏を、屑ともせず。この故に、奸智に長たる墓六も、狐疑尋ぎ龜篠も、すべて額藏を疑はず、密議の席にも侍らせて、此度信乃が許我へゆく、從者にとて遣せしも、なほ謀る事あればなり。かくれば、信乃は額藏が資によりて害を脱れ、無異に夥の年を送れり。この事行ひ易きに似て、甚難かり。假染の所行だにも、心にあらぬ作り事は、色に出、辞に洩て、遂にあらはるゝものなるに、嫌忌天の祐るにあらざりせば、いかでか、けふにあふことあらん。されば額藏は、この年来、竊に信乃が藏書を借り、經籍、史傳、兵書の類を、あるときは懐に、又あるときは、草籠の底に藏めて、草野に出、山林に入るにも、傍に人のなき折は、讀誦せずといふことなし。

唯文事のみならず、木を伐るときは斧をもて、大刀すぢを試み、草を刈ときは鎌をもて、長刀の技を試み、或は桑山子の弓をもて、射藝を自得し、或は牧の新駒にうち跨て、自然に騎馬を習得たり。しかれども人これをしらず、但その膂力ある事は、隠すべくもあらざれば、墓六龜篠等は、僅にこれをのみしれり。よりにて此度中途にて、よく信乃を刺ん事、額藏ならでは叶はじとて、その腹心を告たるなるべし。しかれども額藏は、いまだこの條の生命を、信乃に密語に違なかりき。

かくて両雄は先に立、後になりて、里を出離れんとしつるとき、額藏がいふやう、「わが母の墳塋は、このほとりなる畔にあり、日を累る旅ならずとも、参りて告んと思ふ也。立より給はずや」と誘引へば、信乃聞て、「寔に然なり。某は、きのぶ菩提院へ参詣し、親の墓には別を告しが、とにかくに事の多くて、おん身が母御の墓を漏せり。既に義を結びては、おん身が親はわが親也。いかでかは詣ざるべき。さは」とて兩人連拉て、黎明鴉のわたる比、田の畔を右のかた、三町あまり進み入れば、注連引繞したる、一株の榎樹あり。このほとり則額藏が母の墓也。當時旅にて身まかりしに、墓六これを哀とせず、棄るが如くこの田の畔へ、瘞させたりければ墓石などは建べくもあらず。かくて額藏は、年十可の時よりして、竊にこれを歎く物から、墓碑を建るの資料なければ、竟に「計を設つ、形の如く用意して、有一夕潜に、件の榎へ攀登り、一條の注連を、その梢にぞ掛たりける。次の日、その田を耕すもの、これを見て驚き怪み、彼に告、此に報るに、驚嘆せざるものもななく、」こは全く、この樹に灵のある故歟。さばずは樹下なる土饅頭、亡者が

祠堂を乞へるならん。かゝる奇特あるを見て、つち捨おかは祟あるへし。とせよかくせよ」と罵つゝ、田主はさらなり、近隣の莊客們、各些の錢を出して、彼土饅頭の頂に、細小なる禿倉を建立し、又毎年の春秋には、注連を新にして、その檀を伐ることなし。それを彼此に傳聞て、詣る人尋かれば、誰いふとはなく、「この神は、婦人の諸病を癒し給ふ」と正しげに語りつぎて、禱るに果して利益あり。よりにこの壇を、行婦塚と唱たり。さるから、殘刃無慙の臺なれ共、

【挿絵】「童子の孝感旅魂庵食す」

衆人渴仰の心報におそれ惑ひつゝ、祟あらせじとや思ひけん。はじめ禿倉を建るとき、錢を出したる莊客們に、米一俵宛とらせけり。寔に額藏が詰る所「一点も違はずして、母の墳墓を喪ざるのみならず、遂に田中に庵食す。亡魂の歡びさへに、推量られて感ぶかゝり。是はこれ三月の、童子の智慧に成るものから、亦孝感のおのじから、しからしむる所なるべし。抑この一奇異は、信乃が八房の梅と、同日の談にして、事はその前年にあり。さるを今、はじめてこゝに説出せるは、是より後の物語、よく額藏が事に及べばなり。

題了問話再説 信乃は行婦の墳の事、豫に聞けども今さらば、母の薄命、その子の孝感、われは不及と思ふになん、額藏を先に立て、共倍に類をつき、祈念の中に懷舊の、涙を禁めかねたりける。かくてあるべきにあらざれば、兩人齊一身を起し、思ひ絶てそたつ鳥の、巢鴨を左邊に見かへれど、跡は濁さぬ石神井の、流に添ふて西个原、田畑を過る夏の雨に、追れて義輪の空やどり、石濱村に舟まちて、稍うち渡る墨田河、その樹下の涼しさに、雲時とてこそ柳嶋、こゝ下総と人はいへど、なほ遙なる許我の里、今宵の宿りへいそぎけり。

さる程に信乃額藏は、この日、十三四里の路を走りて、栗橋の驛に宿とりつ。この処より許我の里へ、その途四里には足ざりけり。もし莊官が人をして、跟きすることもや、と豫て思へば途すがら、聊も雑談せず。しかれどもこゝに來るまで、疑しきこともなく、幸にして相宿の、旅客もなかりしかば、兩人心を安くして、絶て久しき閑談に、共に長途の疲労をおぼえず。當下信乃は、額藏に、神宮河の事の趣、暮六が為体、土太郎が事さへに、おちもなく告しかば、額藏聞て、小頸を傾け、「そは入水に假托て、和君を亡んとて謀れるならん、危かりし」と驚嘆す。信乃又且く尋思しつゝ、「害心かくのごとくなるに、又何等の故ありて、彼人年來懸念せし、宝刀の事を思ひ絶て、われをば許我へ遣るやらん。こは只濱路を宮六に、遣嫁せん為のみ故。はじめに許我へ參れといひしは、わが心を放させて、神宮河にて害せん為故。その謀、成らざる故に、われは虎穴を脱れたり」といへば額藏頭をうち掉り、「否、それのみにあらずかし。神宮河の漁獵も、勸めて許我

へ起行せしも、孰まれ和君を殺して、その宝刀を奪ふべく、所領の田園を還さざるべく、竊上を塙にせん為也。そをいかにしてしるやといふに、昨夕甲夜の留守の間に、伯母君が潜やかに、某を閑室に招きよせ、額藏よ。此度汝を従者にして、信乃と共に遣すよしは、一大事を委ん為也。いといひかたき事ながら、信乃は吾侪の侄にしあれど、おもへば過世の讐敵にこそ。渠は親の横死を恨みて、わが良人を仇とし竊ひ、折よくは寝首を搔ん、とこゝろに刃を磨こと久し。そをしれるものは吾侪のみ。然はとて、見定めたる事なくて、血で血を洗ふは一家の恥辱と思ひかへして楯になり、けふまで無異に過せしが、渠今許我へ赴きて、事成らずはかへり來ん。然らはいよくわが良人を、怨て害心日來にますべし。侄を不便にせざるにあらねど、所天には換かたし。よりて汝を憑む也。途にして由断を窺ひ、只一丁刀に刺殺せよ。死骸をば手はやく埋めて、渠が両刀を奪ひとり、竊にもて來て吾侪に見せよ。些の路費もあるべければ、それは汝が得にせよ。これらの密事を果してよくせば、あるじの翁に勧めまつて、汝を楯にすべう思ふに、等閑になこる得ぞ。汝は幼稚ときより、使ひ熟たる小廝なれば、いとも不便に思ふかし。吾侪いかなる悪報にて、人の伯母にはなりたるぞや。侄を殺すは所天の為也。汝は主の為なれば、忠義の二字を忘るゝな。はじめは背介を遣さん、といひつるは中わるき、信乃に疑せじとの為也。汝が外にこの一大事を、任するものはあらずかし。よくせよかし。と口説つ泣つ、甘言に利を示し、こしらへられて、浅まし、と思へど氣色にあらはさず、うけ給はり候ひぬ。大塚殿には遺恨あり。年来の鬱憤を、散さんことはこの時なり、事成らば娘さまを、賜んとまで宣はする、仰に偽りなきならば、命も絶て惜からず。適為課せ候はん。と真しやかに語ひしかば、伯母御前歡び大かたならず。しからんには、汝が折々腰に帶る、刃は切味心もとなし。此は是、わが父匠作大人、護身刀にせよかしとて、わらはに賜たる短刀なり。桐一文字と唱へたる、銳刀なればその徳あらん。これを汝に貸すべきぞ。信乃にはよしを告されは、認りて疑ふことはあらず。人の來ぬ間に、これもて立ね、といひかけて遽しく、刀の囊の紐ときて、この短刀を授られたり。主人夫婦の謀る所、かくのごとくなるときは、和君を出し遣るにはあらず、偏に亡んとするにあり。この桐一文字は和君の祖父、匠作ぬしの像見にこそ。これ見給へ」ときしよすれば、信乃は左右の手に受て、つくく〜と見て額藏がほとりに置いて嘆息し、「祖父は忠義の武士とぞ聞く。その女兒にしてわが伯母は、などてかくまで腹きたなき。二親のなき後は、叔伯母にまして憑じきものはなしとぞ人はいふ。わが身はこれと表裏なり。仇の家に身を置とも、かくまでしうねく謀られんや。さるをけふまで恙なきは、皆はおん身の賜なり。わが父末期の教訓に、わが姉夫婦漸に、志を改めて、実に汝を憐まば、汝

も亦誠心もて、仕へて養育の恩義に報へよ。又その苦心已ずして、遂に響くに術なくは、宝刀を抱きてはやく去れ。五年七年養はるゝとも、汝は大塚氏の嫡孫たり。幕六が職祿は、汝が祖父の賜也。その禄によりて、人となるとも、伯母夫の恩にはあらず。縦報はで去ればとて、それを不義とはいふべからず。これらの理義を思ふべし、といはれし事の今に符合す。先見かくまで灼然なる、大人は凡夫にあらざりけり。九年の同居に衣食乏く、所持の田園を横領せられて、わが身に帶たる物のなければ、彼人の禄を食るにあらず。今にしてこれらの事は、身退くに潔し。且この宝刀、幸に、護て失ふに至らねば、何をか歎き、誰をか恨ん。天運に循環して、青雲の志を、得つべき時節到来せり。翼は大川ぬし。共に許我へ参り給へ。おん身とわれと力を鬪して、彼君を佐なば、両管領も討るに足らず。豈しからずや」と額を合して、このびに説勸れば、額藏聞て沈吟し、「和君のうへは勿論也。某はおなじからず。曩にわが母の終焉に、荘官の残忍なりし、尤恨むべしといへ共、當時某黄童なれば、勢ひいかにもせんすべなく、贖てその家の小廝にせられて、遂に今日に到れり。しかれども一碗の糧、一領の衣の外に、定めたる給銀なければ、その恩義は薄かるべし。よしや恩義は高からずとも、その家の糧をもて、人となりては主従なり。非義非道には與せねども、主の密事を兼引ながら、洩して和君と共に走らは、われも亦不義の奴なり。かくては大丈夫とすべからず。和君は許我へ赴き給へ。某はこの暁に、袂を分ちて大塚へかへらん。如此するときは、兩件の利あり。某非道の主人に肩かず、又濱路との心操、昨々思はず竊聞して、感じおもふ所也。伶俐といふとも婦人の情、遍らば不慮の愆あらん。某竊に、これを貧て、為に謀らん。如此するときは和君がうへに、節婦を棄るの悪評なからん。斯計りに謀て後、某明々に身の暇を賜り、主家を辞して許我に参らは、今共侶に走るに勝れり。亦可らずや」と密語ば、信乃は頻に感佩し、「説得て理あり。然ながら、おん身はわれを撃ずして、還らば必禍あらん」と咄めば、莞尔と笑み、「これらの事は心やすかれ。某は、手足に少許の傷けて、浅瘡を膺る如くに見せ、立かへりていふべきは、犬塚殿を撃んとせしに、敢なくも殺立られて、撃得ざるのみならず、斯瘡を膺ひぬ、と欺かば、あるじ夫婦もすべなからん。只某に任せ給へ」と他事もなく説示せば、信乃はますゝ感謝に堪ず、「よしや偽瘡なればとて、おん身に傷せん事、心くるしき限りなれども、推辞は婦人の仁とせられん。教に悖候はじ」といふに額藏歡びつゝ、密談既に果しかば、おのゝ衣を引被きて、雲時寝に就にけり。